

村上重良先生をしのぶ

島 蘭 進

村上重良先生のご業績は宗教学界でよりも、歴史学界でより高く評価されているかもしれない。『近代民衆宗教史の研究』（1958年、第2版、1963年）が近世近代の宗教運動の研究に与えた影響は大きい。「民衆宗教」の語の用法については、最近さまざまな議論がなされるようになってきているが、ここ三十年の国内でのこの語の用法は、村上先生のご著書に従ったものである。ところがこの語は宗教学の世界ではあまり使用せず、主に民衆思想史を志す歴史学者によって頻用されてきた。

かといって、宗教学者が村上先生のお仕事を無視してきたというわけではない。私のように日本の新宗教や近代宗教史の研究を志す者にとっては、いつも村上先生のお仕事が眼前にあった。先生のお仕事の多くは、アカデミックな論文として形を整えられたものではなかった。資料の検討とか、問題意識の追求とかいう点で、目ざましい展開があるというわけではなかった。しかし、多くの場合、信頼してついていくことができる確かさがあった。とにかくよく資料を見ておられ、事実関係について大きな間違いがなかった。比較的新しい現象、しかも宗教運動という扱いにくい対象を相手にして、よくここまで冷静に資料に目を通されたと感じることが多かった。

もっとも國學院大学の阪本是丸さんなどによると、先生の宗教制度史の叙述には問題点が多いという。ただ、この批判は「国家神道」に対して厳しい視点を持ち、靖国問題などにも取り組んでこられた先生の政治的立場とも関わっている。明確な政治的立場をもっておられることは先生の強さであったが、敵と味方がはっきり別れてしまう寂しさを、その後ろ姿に感じるがあった。しかし、と私は考え込んでしまう。やや片寄りはあるけれども、明確な立場をもって、宗教の世界をきちんと

きちんと切り裁いていく先生のような方が、世論の形成にとってはどうも必要なようだ。村上先生が去られた後、大きな穴ぼこがあいてしまい、宗教を見る世論の目の混乱が深まっているように思えてならない。宗教と政治という点で、立場こそ違え、先生が堂々と立っておられたので、後輩はその後ろに隠れておれたとも思える。

先生が宗教教団に調査に赴かれるとき、どのような姿勢で臨まれるのかは、私にとって謎だった。あるとき、私たち若い者を前に、次のような主旨のことをおっしゃった。宗教教団を訪問する時は絶対にすなおに相手を信用してはいけない。教団側は事実そのままを知ってもらいたいのではない。資料には必ず裏があると思って目を通さなければならない。それをうかがって私は少し驚いたが、今思えばそのご発言は先生の厳しい自己抑制の姿勢に裏打ちされたものであろう。先生は宗教教団の思想や行動を高く評価されたり、厳しく批判されることがあるが、それはすべて先生の価値評価の基準からずれていない。教団側と情緒的にもたれあったり、感情的に対立したりということがほとんどなかったのであろう。これは容易なことではない。

私にとってもっとも印象的な思い出は、春秋社の『大系仏教と日本人10 民衆と社会』（1988年）の月報で対談をさせていただいたときのことである。論点は主に大正時代以降の新宗教をどのように評価するかという点であった。初めて大先輩に向かって私見を述べる機会を与えられた私は、勢い込んで考えを述べた。先生はその本に収められた私の論文の意図を正確に理解しておられ、それにのっかって述べる私の主張に、いちいち見事に答えられた。「幕末維新时期というのは実に自由な空気があったということをつくづく思います」と

いう先生のお言葉がはっきり記憶に残っている。意見は最後まで対立したままだったが、私は大事なことを習ったと思い、さわやかな気分だった。

村上先生が唯物論者であることは衆目の一致するところである。攻撃的な論陣もたびたび張られたし、裁判闘争には執念のようなものもお持ちだったろう。しかし、私の頭の中では、先生は托鉢僧

のようにひょうひょうとしておられるのである。染井墓地をよく散歩されるという話をうかがったせいかもしれない。晩年の先生の印象につきすぎているかもしれない。ともあれ、そういう像が見える。野原にすっきり一本の木が立っていて目印となっていた。その目印が見えなくなってしまった。